

見立絵本『道化生花』について

高橋 則子

大阪大学附属図書館忍頂寺文庫蔵『道化生花』（請求番号H 17）について、以下の順序に従って述べる。

- 一、解題
- 二、写真版
- 三、翻刻
- 四、注釈
- 五、考察

一、解題

表紙 後のもの。薄茶色無地。縦十五・八cm×横十一・四cm。小本。
題簽 なし。
構成 序（一丁半）、本文（二十七丁）。但し半丁に図版、半丁にその説明、奥付（半丁）。
序末 「安永七つ」とし あらたまる春 酒楽斎書 美農。
内題 なし。
柱記 なし。丁付けのみ。

丁付 序に「序」、本文に「きゝ廿七」。
著者 酒楽斎瀧磨か。
匡郭 なし。字高縦十三・二cm×横八・〇cm。
奥付 「安永七戊戌年 江戸橋四日市広小路 竹川藤助」
蔵書印 静村文庫（忍頂寺務）。

本書は『国書総目録』には

見立花づくし みたてはなづくし 一冊 著 洒落斎 成 安永七刊
版 阪大

とある。また、

道化生花 どうけいけばな 一冊 類 花道 著 洒落斎 成 安永
七刊 版 栗田・村野

とある本も、本書との関係を推測させるが、栗田元次旧蔵書、村野時哉旧蔵書は、どちらも現在不明であり、確認できない。日本書誌学大系8『書誌学の発達』（昭和五四年刊・一九七九）所収「栗田文庫善本書目」には記載されていない。

国文学研究資料館データベースの『日本古典籍総合目録』には、「見立花づくし」は作者が「洒楽斎（洒落斎）」、安永七年刊、阪大蔵とされ、

また「見立花くらべ」は作者が「謡東斎」、安永七年成立、阪大忍頂寺文庫の請求番号H 17の本書にリンクされている。「道化生花」は、作者が「酒楽斎」、安永七年刊で、栗田、村野に版本所蔵と記される。
現在所見に及んだ個人蔵のもう一本は、栗田・村野に蔵されていたものとの関係は不明である。書誌を記す。

表紙 原のもの。縹色無地。縦一五・九cm×横一一・四cm。小本。

題簽 後のもの。「花つくり 安永七年」と墨書。

構成／奥付 大阪大学忍頂寺文庫本と同。

蔵書印 林若樹、古堀栄の蔵書印あり。未詳の印一つあり。

『大阪大学付属図書館所蔵 忍頂寺文庫目録』（平成二三年三月発行）には、本書は一〇六ページに

「道化生花」刊 小 一冊 酒楽斎 安永七年一月自序 安永七年江戸竹川藤助 作品名は「国書総目録」による 81-228-66 H 17
とあり、この『忍頂寺文庫目録』の書名を本論では踏襲する。

先行研究は、中野三敏氏が「見立て絵本の系譜」（昭和四七年・一九七二・『語文研究』三四号所収、後に『戯作研究』昭和五六年・一九八一・刊に再録）で、見立絵本目録に

「見立花くらべ」小本一冊 安永七年刊 洒落斎 江戸板 花の見立（『洒落本大成所収』）

と記載されているが、『洒落本大成』には収録されなかった。その後同氏は「見立て生け花（二）」「見立花のお江戸」（『彷彿月刊』平成一三年・二〇〇一・七月号所収、後に『和本の海へ 豊饒の江戸文化』角川選書・平成二二年・二〇〇九・二月刊へ再録）の中で、一部分の翻刻及び注釈

（序・で花・藍花・角がづら・高慢の花）をされ、書名を安永八年（一七七九）改刻本『童唄故実今物語』の広告より『見立花のお江戸』と推定すると述べられている。本書忍頂寺文庫本についても、写真版四枚を掲載し、「見立花づくし」という仮題が与えられていることについて触れている。

本書の作者は序の「酒楽斎」である可能性を、考察で述べる。文政元年（一八一八）成立三代目瀬川富三郎編の江戸人名録『江戸方角分』には、「酒楽斎」は未載である。先行研究では「酒楽斎」とされてきた著者名であるが、「写楽斎」は、『江戸方角分』には東洲斎写楽以外には存在せず、「酒楽斎」は記載されない。「謡東斎」も記載されない。

本書の挿絵は著者によるものか、他の画工によるものか判然としないが、安永五年（一七七六）刊の洒落本『当世左様候』に描かれる図は本書と類似した画風である。『当世左様候』の著者「藩中館新吾三」は、『明和伎鑑』の作者淡海三磨かとされているが（注1）、絵師が誰であるかは未詳である。

本書板元の江戸橋四日市広小路 竹川藤助は、明和九年（一七七二）刊『古今役者論語魁』・天明元年（一七八一）刊『混雑倭艸画』（湖竜斎画）の板元でもある。

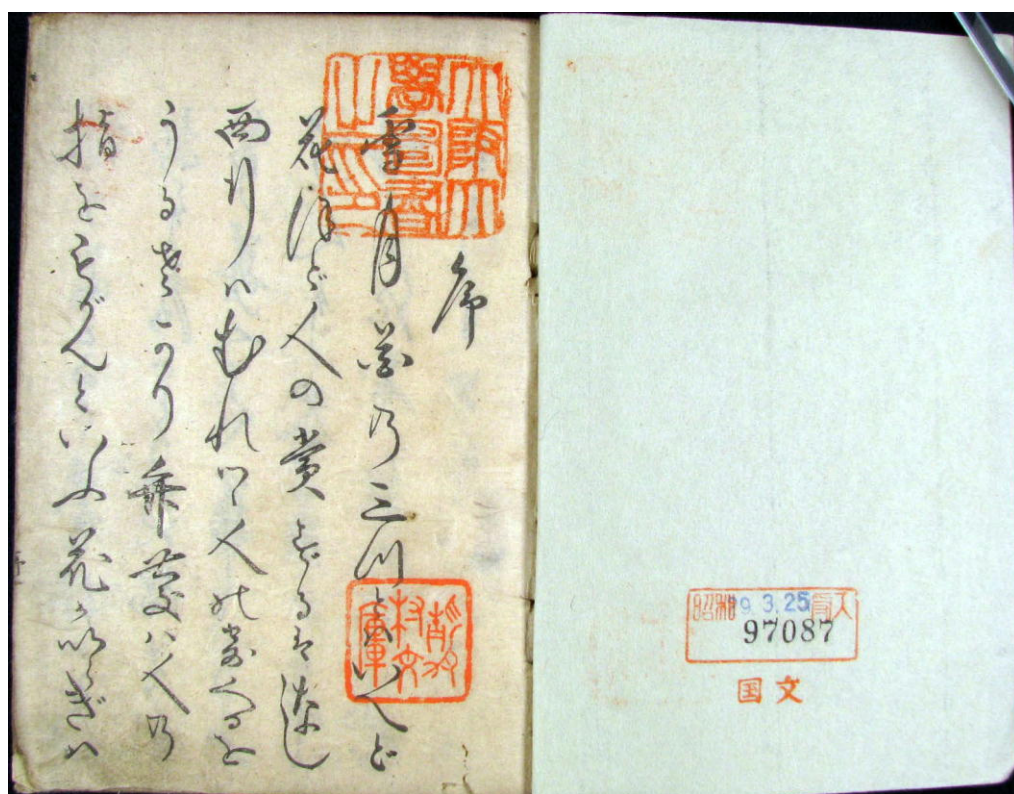
（注1）『洒落本大成』第七巻（昭和五五年・一九八〇・一月刊）解題（浜田啓介）。

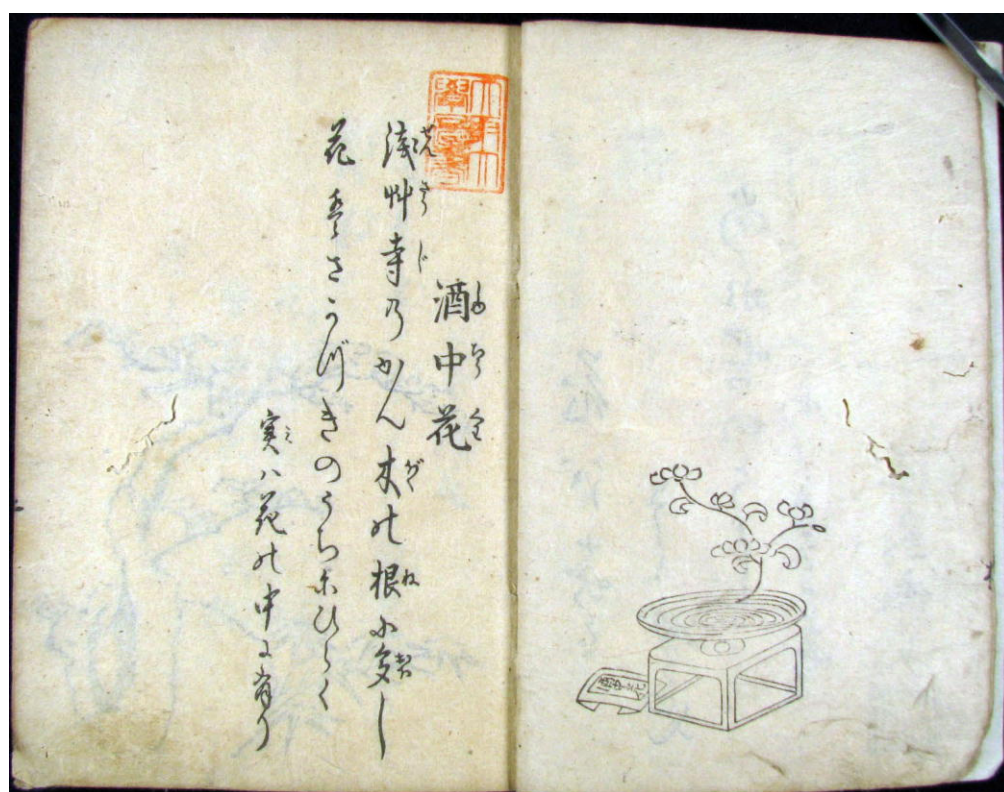
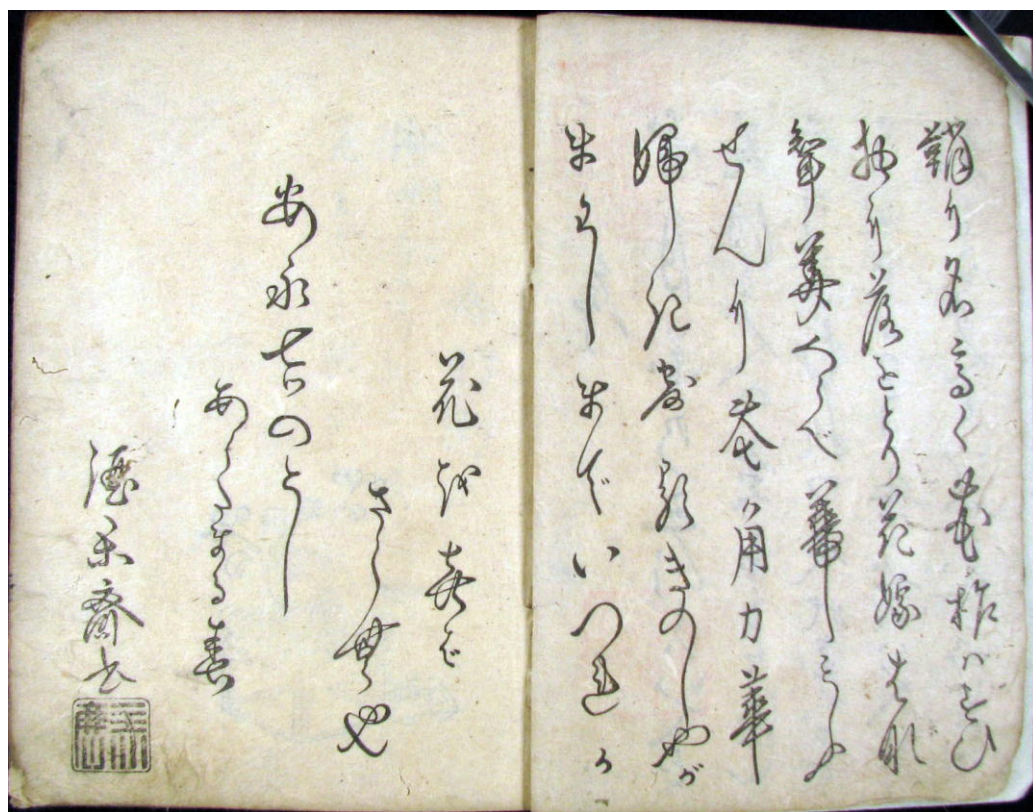
二、写真版

(表紙)



(序才・序ウ)















(十四ウ・十五才)



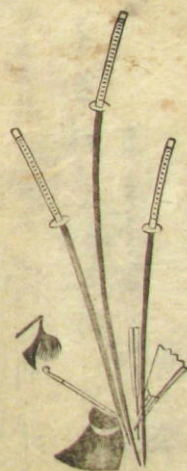
あ
と
花

さましく 緑 健く 一言 榮う 人の
 庭に 花を 利う 人々 歩ん 足と
 には 雲 実の 雨の 師 新 草と 又
 摘み けり 玉の 手 い ひと

あゝそ
新
花

ちのへ

(十五ウ・十六才)



高
情
乃
花

形人いさ色^{イロ}りて死^シの^ハ無^ムとあて
ふわり赤^{アカ}く^クあ^アん^ンぶ^ブあ^アの^ノま^マり
ゆ^ユう^ウく^クく^ク死^シま^マし^シ



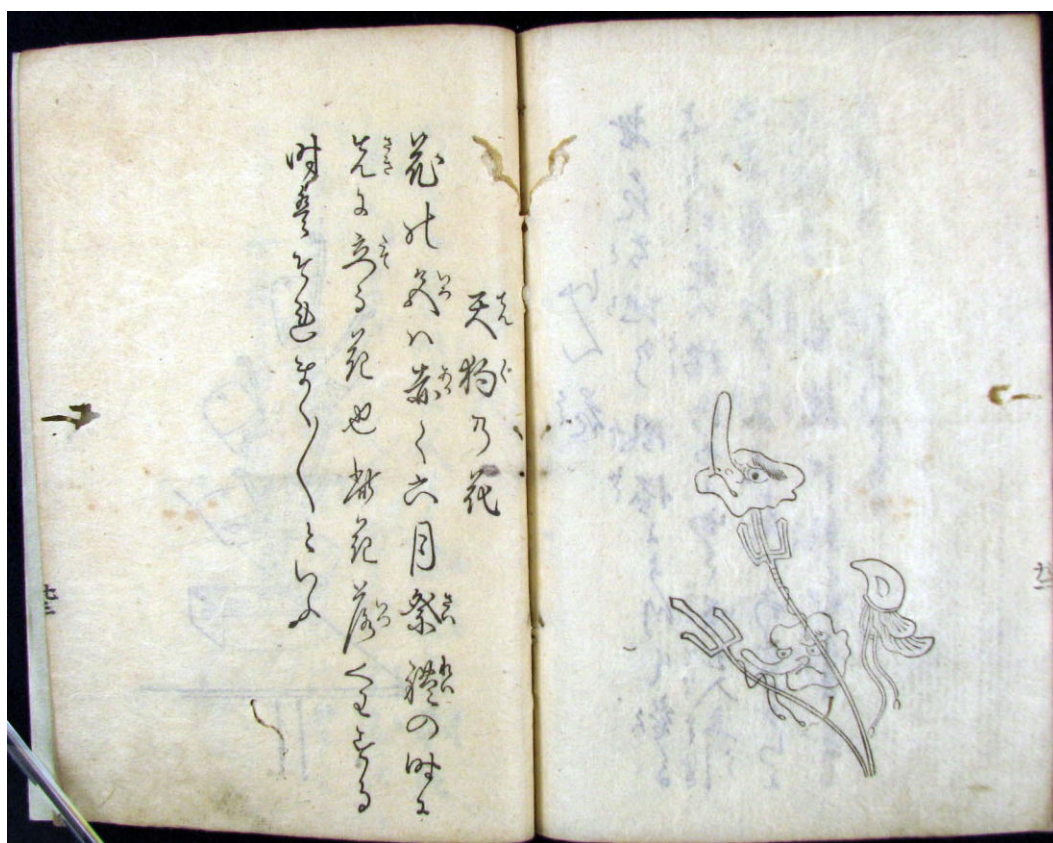
(十八ウ・十九才)



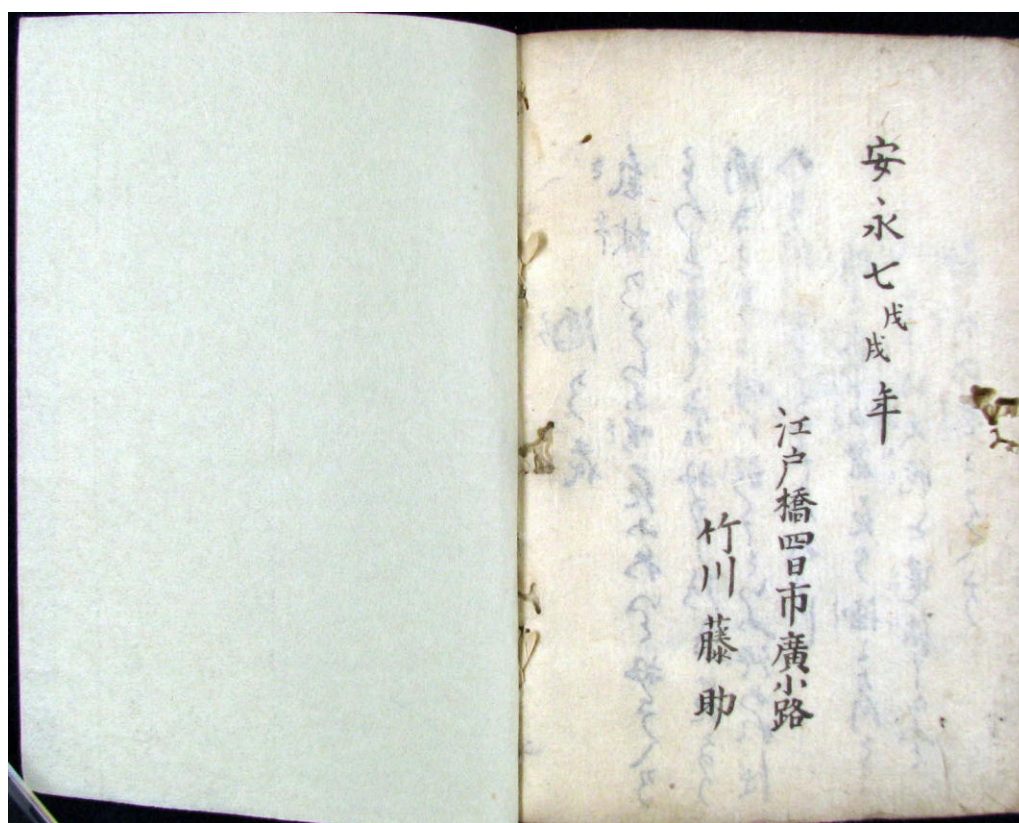
(十九ウ・二十才)











三、翻刻

(序) 雪月花の三つとはいへど、花ほど人の賞するはなし。西行はむれつゝ人の寄くるをうるさかり、弁慶は人の指をもがんといふ。花かいらぎは鞘に名高く、花柝はすひ物に落をとり、花嫁、はな婿、華くらべ、華もふせんに花角力、華ふき寄るきのしやがまわしまで、いつれか花を喜ばさむや。安永七つとし あらたまる春 酒楽齋書 美農

(1ウ・2オ) 酒中花
浅草寺のかん木の根に多し。花はさかづきのうちにひらく。実は花の中に有り。

(2ウ・3オ) 木ごとの花
花は寒中にさく。朝日にあふて落花す。
花似白粉艶顔粧
実成薄氷玉笄飾
楽天も作れり。

(3ウ・4オ) 湯花
至て清浄なる花なり。神前に咲。実は神たくよつてなるも、この実を喰へば火難なんをまぬがるゝとかや。

(4ウ・5オ) 雪月花
とかく王城の地につく、上品なる花なり。葉を万葉といふ。実は古今集になる。

(5ウ・6オ) で花
花は四でう半のうちに咲。実はぶくかげんにてなる。とかく物新らしきをいむ。此花の立よう、分て秘伝あり。千の利休此道に妙たり。

(6ウ・7オ) 寝入花
夜る八つ時分より、七つ時分までさかり也。実を寝言といふ。獏と云けもの、このんで是を喰ふ。もろこしのろせい、此花一睡の内に、五十年の栄花をきわめしとかや。

(7ウ・8オ) 藍花
こん屋のかめのうへに咲。雨をきらふ花なり。色さまあり。実をあい玉といふ。此花のさかりをみるとすれば、明後日御出といふ。

(8ウ・9オ) もち花
花は十二月廿日頃より、甚いそがしく咲。実はいり物となる。又一種あり。名つけて目黒みやげといふ。此花大方品川の鉢うへとなる。

(9ウ・10オ) 法の華
仏書曰此華を結縁する衆生は、皆令入仏道と説給へり。花を法華經といふ。実は極楽になる。ある人の句に、鶯のこゑ殊勝なり りんの音。

(10ウ・11オ) 角かつら
薦かつらに類す。十一月顔見勢の時、しばらくの声を聞て、切幕のうちより咲。葉はびん髭に似たり。一説曰、斎藤別当実盛篠原合戦の時、此葉

をもつて白鬢をかくせし故事あり。

(11ウ・12オ) 波の花

一名塩花といふ。むかしさがの天皇の御宇、融大臣此花をすかせ給ひ、道はる／＼と、みちのくの千賀の浦より取よせ、庭前に植させ給ふ。然ども其後は、さうぞくしてもてあそぶ人もなければ、貫之も詠て 君まさで詠たへにし塩花の 庭さみしくも見へわたるなり

(12ウ・13オ) 床花

毎夜くるわの内に、蒲団のあいだ、又は多ばこ入のうちにさく。此花落花すれば、文と実のる。

(13ウ・14オ) に花

宇治より出るを最上とす。花を茶のみ花しといふ。どつとわらふてさく実を茶のこといふ。東山よし政公、大内之介に命じて、初て是をうへしめ給ふと、宇治の通ゑんが夜話に出たり。

(14ウ・15オ) ます花

さま／＼詠つくしたる栄よう人の庭にさく花なり。よつてます花といふ。此花実の時は、御新草といふ。摘わけて、玉の手いけとなるは此花なるべし。

(15ウ・16オ) 高慢の花

形大いき過にして、花は髭をなで、やに下りに咲。なんでもしつたりぶりにてさく花なり。

(16ウ・17オ) 見るめかく花

此花とかく地獄の土にそうわうして、しやばにはなき花也。なれとも盆と正月の十六日には、勧善懲悪のために、閻王殿に立花とす。悪人をみては、花くわつとひらき、善人を見てはねふるがごとし。葉を鉄札といふ。実は閻魔の帳になる。誠に是等を奇花怪草とやいわん。

(17ウ・18オ) お花

かたち六角にして、色源平とわかる。花大小にしてひり、かんきんの名有り。正月さかりにして、二三月時分迄花あり。毛せんのうへに咲。

(18ウ・19オ) こがねの花

花の色は山吹に似たり。実は大尽の懐になる。むかし陸奥国山田といふ所より出たるとかや。大伴の家持の哥に すべらぎの御代栄んと東なるみちのく山にこがね花さく

(19ウ・20オ) はつの花

一名花よめといふ。
きよきこくしゆんりうぶくむがしよけつを
清如春柳含初月
あんなるにたりとつくわぶるにきやうあんなを
艶似桃花帯暁烟
花はおもはゆげに咲。実は新枕といふ、うつくしき花なり。

(20ウ・21オ) 湯の花

一名温泉と名づく。すべて深山の麓に咲。実は壺廻り過てなる。いかなる難病もこの花をせんじて用ゆる時は、忽平愈うたがひなしと、

本草綱目に出たり。

(21ウ・22オ) けん花

此花土地の風俗によつて替る。上方の花は、橋づめに出て咲。出入立引の名有り。江戸氣の花は、あたまがちにしつ腰なし。甚酒を好む。実はあやまり証文となる。

(22ウ・23オ) 天狗の花

花の色は赤く、六月祭礼の時に先に立る花也。此花落くわする時は、それまくくといふ。

(23ウ・24オ) 縁花

たそがれ時に、人よく此花の本に集る。葉をつんで楽しむ。其名を一休草といふ。往來のもの、つむ事かたく無用と、名主月行事、是をいましむる。

(24ウ・25オ) 外花

和訓にげ花といふ。実はかうやくになる。いけ花金草には、此花をあいにらふてよし。

(25ウ・26オ) 象の花

むかし南越国より渡る。今に嵯町におめて、三ノ年に一度づゝ花さく。実もまんぢうとなる。

(26ウ・27オ) 酒の花

氣林のうちに咲。花にあいとおさへのもつれ有て、最おもしろき花なり。酒きわまる時は、乱るゝといふ語あれば、あまり盛り過たるはあしし。佐々吞尊、此花の徳によつて、八またの大蛇を退治し給ふと、神代の巻に見へたり。

(27ウ)

安永七戌戌年

江戸橋四日市広小路

竹川藤助

四、注釈

(序)

○西行は群れつつ人の寄り来るをうるさかり 『山家集』に「閑かならんと思ひける頃花見に人々のまうで来れば 花見にと群れつつ人の来るのみぞ あたら桜の咎にはありける」とあり、謡曲『西行桜』にも「花見んと、群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、咎にはありけるゝひとり心を澄ますところに、貴賤群集の厭はしき、心をすこし詠ずるなり」とある。

○弁慶は人の指をもがんといふ 須磨寺の梅樹に「此花、江南ノ所無也、一枝折盗ノ輩ニオイテ八天永紅葉ノタメシニ任せ、一枝ヲ伐ラバー指ヲ剪ルベシ」の弁慶自筆の制札を立てて、庇護したと伝える。ただしこの説話の出典は未詳で、『義経記』には載らない。宝暦元年（一七五一）初演浄瑠璃『一谷嫩軍記』には、この弁慶の制札が重要な意味を持つものとして登場する。そして、ここでは梅ではなく熊谷桜についての制札となっている。

○花かいらぎ 花梅華皮。鮫皮に大粒の梅花形があるもの。刀の柄・鞘などに用いる。

○花柞 ははそ 柞はナラやクヌギの総称だが意味不明。花柚であれば、花・蕾

・果実の皮の切片を酒や吸い物に入れて、その香気を賞するもの。

○華くらべ 花合と同じで、東西に分かれ、種々の花を出し合って優劣を競う遊戯。

○華もふせん 花氈。模様のある毛氈。

○花角力 春秋二期に興行した本場所の相撲に対して、それ以外の相撲もと木戸銭をとらず、客の祝儀だけで興行したことからいった。花合と同じ。

○きのじや 安永九年序の洒落本『噺之画有多』（『洒落本大成第九巻』所収）に「享保のすへ、中の町に喜右衛門といふものあり。元来小田原町生れにてありければ、りやうりなどこうしやにしけるにより、ふとだいのものやをおもひつき、角町かとへみせを出せしに、めつらしき仕出しなりとて評ばんよく、喜の字のかたへ肴を取につかはすべきなど云はやしければ、し

ぜんと喜の字やとよびならわしける」とあり、その挿絵に店先で板の上に生け花が活けてある図が描かれている。吉原に出す仕出し料理の大きな州浜型の台に飾った生け花ではないかと思われる。また、川柳に「喜の字屋の台にはびこる始皇帝」（台の物に松を立てる）もある。

○まわし 廻し方の男。吉原では遊女の座敷・部屋・寝具・器物などの事を扱い、岡場所では女郎の送り迎えなどの雑事をする男のこと。



（1ウ・2オ）

○酒中花 山吹の茎のずいなどで花鳥を作り、酒に浮かべて、ふくれて広がるのを見て興とするもの。

○浅草寺のかん木の根に多し 浅草の楊枝店で売られていたから。楊枝店を「楊」の字に柳の意味があることから、柳の木に例えたものと思われるが、「江戸の楊枝店」（樋畑雪湖、『江戸時代文化』第一巻一号所収、昭和二年・一九二七・二月）によれば、房楊枝の中でも特に「灌木」と称するものがあつた。これは柳ではないという意味で、男性用であり、桃などの木の先頭を湯煮して鉄槌などでたたきつぶして、針でできた櫛ですぎあげて房としたもの。柳の楊枝は柔らかく先端をむしり取って使用した。これはお歯黒が剥落しないようにするため、女性用であつた。

（2ウ・3オ）

○木ごとの花 雪のこと。『古今和歌集』巻第六冬歌に、紀友則の歌「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにける いづれを梅とわきて折らまし」がある。

○花似白粉艶顔粧 実成薄氷玉笄飾 出典未詳。『漢詩大観』（佐久節・昭和十一年刊・昭和四十九年復刊）、『白氏文集歌詩索引』（平岡武夫・今井満編、同朋舎出版、平成元年刊）データベース『四部叢刊』（北京書同文数字化技術有限公司、二〇〇三年）による検索でも発見できなかった。『本朝文粹漢字索引』（藤井俊博、株式会社おふう）、『古文真宝』、『唐詩選』、『和漢朗詠集』にない。『円機活法』「雪」の項にもこの一節はないが、「春雪」の中に「似花開」という表現方法があると記され、例文として「古詩」の「春雪浦空来 触处花開」が引用されている。本作は作者自作かと思われる。

（3ウ・4オ）

○湯花 神社で巫女や神職が、湯の沸騰時に上がる泡を笹の葉につけて、

参詣人にかけ、浄めたり神託を仰いだりする。図の花器は湯を沸騰させる釜、花は笹や御幣。

(4ウ・5オ)

○雪月花 和歌で最も多く詠まれるもの。花器は机、花は短冊・筆、硯。

(5ウ・6オ)

○で花 出花。出端。番茶、煎茶で湯を注いだばかりの、香りのよい頃合い。お茶の花柳界の言い方。「お茶をひく」(遊女に客がつかない)から、「茶」という語を忌むため。ここではの意味と思われる。花器は風炉、花は茶杓に茶筌など。

○四でう半 四畳半。茶室の大きさは、四畳半を基本とする。

○ぶくかげん 服加減。茶の湯で、茶の温度、濃淡などの具合。またそのちょうどいい具合のこと。

○千の利休 千利休。室町時代末、安土桃山時代に出た茶の湯の大成者。信長・秀吉に取り立てられ、特に豊臣秀長と提携して、秀吉の側近政治に深く関与した。秀長の死後、石田三成らに排斥され、秀吉から謹慎命令が出され、京都の自宅で切腹した。

(6ウ・7オ)

○寝入花 寝入り端。寝入ってまもない頃。花器は括り枕、花は廬生の夢。

○八つ時分より七つ時分 午前二時頃から午前四時頃。

○獏 中国の想像上の動物。鼻は象、目は犀、尾は牛、足は虎で、体型は熊に似るといふもの。人の悪夢を食うといい、その皮を敷いて寝れば疫病を避け、その形を描けば邪気を払うという。

○もろこしのろせい 廬生。中国唐代小説の『枕中記』の主人公。廬生が邯鄲の客舎で、道士の呂翁に枕を借りてねむり、夢中栄華を極めた話。夢が覚めると黄梁をたく僅かの時間であったので、「黄梁一炊の夢」ともい

い、人生のはかないことにたとえていう。

(7ウ・8オ)

○藍花 藍をかめの中で発酵させる時に出る泡を「藍花が咲く」という。花器は藍かめ。花は刷毛やかきまわす棒など。

○雨をきらふ 染め物屋は雨を嫌うから。

○あい玉 藍玉。藍の葉を搗いて発酵させた上、臼でひき、乾燥し固めた染料。

○明後日御出 諺「紺屋の明後日」より。紺屋の注文の染め物の期日が、とかく延びがちであることから、約束した期日のあてにならぬたとえ。

(8ウ・9オ)

○もち花 餅花。正月、小正月、節分などに各家で行う予祝行事の一つ。柳、竹などの木の枝に餅をちぎってつけ、花の咲いたようにしたもの。神棚や室内に飾る。江戸目黒不動などで売った縁起物。赤、白、黄などに

彩った餅を花のように木の枝につけたもの。花器は餅搗きの臼。花は杵、柳の餅花。

○目黒みやげ 目黒不動尊参りの土産として、餅花を買った。

○品川の鉢うへ 品川の遊郭で、餅花を室内装飾に用いたという意味。「餅花の月越になる不届さ(品川泊まり)」「しわん坊連れの餅花ことづかり(品川のつきあいせず)」「餅花を下戸取集め持つてくる(上戸は皆品川へ)」「餅花をことづかつたでにぢられる(上戸党の内儀に)」

(9ウ・10オ)

○法の華 法の蓮の花。仏に供える花。また、仏道の精華。花は經典、数珠。

○結縁 仏道に縁を結ぶこと。大切にすると、関係すること。
○皆令入仏道 「法華経 方便品」より。すべては仏道修行のたよりとな

るという意味。

○鶯のこゑ殊勝なり りんの音 『古典俳文学大系』CDROM 版索引によつて調査すると、類似作品に「鶯の経よみうつや花のりん」(『犬子集』巻第一、寛永十年 一六三三 刊、松江重頼)があり、花の輪(花びら全体)で鶯が鳴く様子を、「経読鳥」の異名がある鶯に「鈴(読経の時にたたいて鳴らす小鉢状の仏具)を打つ」ことをかけて詠んだものである。同句は『崑山集』(慶安四年 一六五一 鶏冠井良徳)にも載る。本作は作者自作か。鶯の鳴き声は殊勝である、りん(輪、鈴)の音だから、という意味か。

(10ウ・11オ)

○角かづら 角鬘 角前髪鬘の略称。江戸期には元服の一二年前、前髪のきを僅かに剃る習慣があり、これを角を入れると称して、その髪型を角前髪と呼んだ。この髪型を模したのが角鬘で、「暫」や曾我五郎の扮装にこれを用いた。これを蔓草の総称である葛(蔓)にかけたもの。花器は暫の衣裳である柿色素袍や力紙や侍烏帽子、花は市川家の定紋である三升の紋入りの大太刀や角鬘。

○蔦かづら 蔓草の総称。葛(蔓)。

○切幕 『戯場訓蒙図彙』(式亭三馬作・享和三年 一八〇三 刊)には、揚幕と切幕が併記され、「花道の出入口に懸る。花色地に白にて座元の定紋を大紋に染め出す」とあり、「切幕」と「揚幕」が併用されていたことがわかる。揚幕は、能の揚幕の変形であり、花道の突き当たりにある幕で、紺地に櫓紋もしくは興行会社の紋を白抜きで染めた幕に、金属の環をつけ、左右に開閉するもの。寛政九年(一七九七)に花色地から紺色に変わった、という(『演劇百科大事典』)。

○びん髭 髭(頭の左右側面の髪)と髭もしくは耳のわきの髭。

○一説曰斎藤別当実盛 『平家物語』巻七で、石橋山合戦で頼朝と戦つて平家方についていた斎藤別当実盛が、赤地の錦の直垂を着て戦い、手塚の太郎と組んでも名乗らずに首を取られ、木曾義仲に「いまは定めて白髪にこそなりぬらん、びんびげの黒いこそあやしけれ」と不思議がられて、洗わせてみると白髪になったという話からこじつけた。

(11ウ・12オ)

○波の花 白波を花に喩えていう語。食塩の女房詞。ここではの意。花器は塩の山、花は青海波模様の担桶とそれを前後にかけて担ぐ棒。

○塩花 潮花とも書く。白浪。潮が飛び散る様子。不浄を清めるためにふりまく塩。料理屋などの客商売の家の出入口に、三つまみ並べ置く塩。もりしお。ここではの意。

○融大臣 源融。八二年・八九五年。平安初期の、嵯峨天皇の皇子。河原左大臣と称された。左大臣にまで昇進したが、藤原良房・基経らの執政下で力を伸ばせず、河原院や嵯峨の山荘で豪華な生活を送った。特に河原院は、陸奥の塩釜(宮城県松島湾内の塩釜の浦)の景を模したことで有名である。

みちのくの千賀の 謡曲『融』に、「陸奥の千賀の塩竈」が複数回使われている。

然ども其後は、さうぞくしてもてあそぶ人もなければ、貫之も詠て、「君まさで詠たへにし塩花」 謡曲『融』に、「しかれどもその後は相続して翫ぶ人もなければ、浦はそのまま千汐となつて」されば歌にも、君まさで、煙絶えにし塩竈の、うらさびしくも見えわたるかなと、貫之も詠めて候」とある。

○君まさで詠たへにし塩花の 庭さみしくも見えわたるなり 『古今和歌集』巻第十六 哀傷歌に、紀貫之の「君まさで煙絶えにし塩竈の うらさ

びしくも見えわたるかな」が載る。その詞書きに「河原左大臣の身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、塩竈といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる」とある。和歌は貫之の歌のもじり。

(12ウ・13オ)

○床花 遊里で、客がその女郎と馴染みになった(三会目)しるしに与える祝儀。寢床の中で与える花の意。洒落本『傾城買四十八手』(山東京伝画作・寛政二年 一七九〇 刊)の「見ぬかれた手」で、「部屋ざしき(大見世の部屋持ち女郎のことか)」の女郎が、名代(馴染みの客が重なって、後の客には新造を代理で出す)の野暮な武士客が帰ると言って拗ねるところを、冷静にうまくあやつりつつ「こちらのさむらい客をば、たかをくくって居るゆへ、まづ三会めの客をつとめ、もはや床花の三両もしめてきたゆへ、大の平気なり。此うちを一両はやり手の時がりをかへし、二分は小間物屋の内金にわたし、二朱はかし本やのはらひ、一分はあんまの心づけと、心のうちではさん用しながら」とある。昼三(大夫・天神が廃絶した宝暦以降は、遊女の最高位。散茶女郎から発生したもので、平の揚げ代が昼夜で三分 一両を仮に十万円とすると、七・五万円であつたために生じた呼称)の床花は千足、即ち二両二分というのが定例だった。花器は煙草入れ、花は一両小判が二枚ずつ。

(13ウ・14オ)

○に花 煮端。煎じたての味も香りもよい頃合いのお茶。ではな。いればな。花器は茶釜、花は柄杓や茶碗。狂言『通円』で通円が柄杓と茶筌を右手に、茶碗を左手に持って腰掛け、宇治橋供養の時の話をする。それを取り入れたものか。

○茶のこ 茶の子。仏事の配り物。茶つけ。茶を飲む時に食べる菓子、またはその代用品。ここでは の意味。

○東山よし政公 日本で最古の花道書とされている『仙伝抄』は、奥書に「頼政(義政の誤りとされている)」の名が見え、その後半には「相阿彌筆 義政公御成式目一卷」が付される。なお、『仙伝抄』には元和版寛永版の版本がある。

○宇治の通えん 茶人。大慶庵と号し、宇治橋岸に住み、茶をたてて売るを業とした。宇治橋の東詰めに「通円の茶屋」として、有名な茶を売る店があつたが、これはその後のことである。『都名所図会』宇治橋の項に載る。ただし、狂言には、東山義政公の話には触れられない。

(14ウ・15オ)

ます花 増花。より愛する女。花器は振り袖、花は簪や笄や櫛。

栄よう人 栄耀人。贅沢をし尽くした人。金持ち。

御新草 ご新造。武家または富商の妻の敬称。中流以上の町家の妻にも用いた。明和七年(一七七〇)刊『蕩子筌枉解』の中に「江戸近在の名主にうけだされ今御新ざうとよばれしかもなんのふ自由もなくくらしける女郎」とあり、本書の場合も、遊女が富商に請け出され、子供ができてご新造となったことを表す。

(15ウ・16オ)

いき過 行過、「ゆきすぎ」とも。余りに通人ぶって、かえって通人らしさを失うこと。度をすぎた意気。しゃれすぎて、かえっていやみなこと。

やに下り 肘を張り、煙管の雁首を高く上げ吸い口を低くしてくわえること。転じて通人ぶった態度。また大小の落とし差しのことという。花は落とし差しの刀、やに下りの煙管、本多頭、大坂頭巾(竹田頭巾・亀屋頭巾とも)、扇子。安永四年(一七七五)刊『金々先生栄花夢』(恋川春町画作)で金々先生が吉原へ通う時の様子が、落とし差し、大坂頭巾で、通うものがある。

しつたりぶり 知つたり振り。知つたふりに同じ。知つた風をすること。安永二年刊『当世風俗通』「中之息子風」に、「この風俗はもつての外の高慢。…知らないでもしつたりぶりかよし」とある。

(16ウ・17オ)

見るめかく花 見目嗅鼻。

閻魔の庁にある人頭にんずどうの称。はたほこの上に男女の頭を載せた形のもので、男（見目）は凝視し、女（嗅鼻）は嗅ぐ相を示す。これによって亡者の善悪を判断する。

鉄札 閻魔の庁で、人間の善悪を記す鉄製の札。花は見目嗅鼻で、葉は鉄札、筆。

(17ウ・18オ)

○お花 阿花独楽。辻賭博に使う六角形の紋独楽のこと。『宝曆現来集』に「辻賭博とて、これも寛政中頃迄は、専ら市中繁華なる処へ出て、往来の人勝負せり。田舎道などは猶さらなり。是はなごま逆、六角のこまへ紋六つ書、又紙へ同じ紋を六つ書置て、人々好みの紋へ銭四文のせ置ば、こまを巡して、上の方へ出たる紋へ十六文遣ける」とある。『随筆辞典2』（朝倉治彦・昭和三五年刊・東京堂出版）「独楽の模様」の項に、お花独楽の諸説が載り、お花独楽は、古くはだるまや桃太郎の絵を描いたり、花の絵を描いたりしたが、必ず女を描き、その所が出ると勝ちになったという。また、札は独楽と同じ絵で少し大きく、心棒は銀メッキ、惣体黒の上花ぬり、絵の部分は絹地に金箔を押したものの、という。



花器はお花独楽、葉は独楽と同じ絵が描かれた札、花は銭。

(18ウ・19オ)

むかし陸奥国山田といふ所より出たる 『続日本紀』巻第一七聖武天皇天平勝宝元年（七四九）の記事が文献上の産金の初見とされる。聖武天皇が東大寺に御幸し、陸奥国の黄金産出を仏の恵みと慶賀して、このことを仏前で詔する中に「此の大倭国は天地開闢あめつちひらけてより以来に、黄金は人国ひとくにより献たまめることはあれども、斯の地には無き物と念へるに、聞こし看す食国を食くにの中の東の方陸奥国守從五位上百済王敬福かたみちのあきい、部内の少田郡に黄金在りと奏して献たまれり」とある。一六世紀初期までは陸奥の砂金地帯（宮城県北部から岩手県南部）が主要な金の産地であった。少田郡とは小田郡とも記し、現在の宮城県遠田郡東部に当たる地域。山田は小田の誤りか。百済王敬福とは、百済義慈王の四世の孫で、郎虞の子供。以後常陸守、出雲守等を歴任する。

すべらぎの御代栄んと 『万葉集』巻第一八に大伴宿禰家持の歌が「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌一首」の詞書とともに「葦原の瑞穂あしはらのみづほの国を 天降り領らしめしける 陸奥の小田なる山に黄金ありと 海行かば水浸く屍みづみ 山行かば草生す屍」の長歌の反歌として「天皇の御代栄すめろきえむと東なる陸奥山に黄金花咲く」とある。花は黄金の小判。

(19ウ・20オ)

はつの花 初花。年頃になりかけた少女の形容。また初潮の意味もある。一名花よめといふ「花」が花嫁の略称である場合もある。新婚の花嫁の意味か。花器は耳盥（鉄漿付けに用いる）とその上に鉄漿壺やふしの粉を載せる台、花は鉄漿付け用のはねようじもしくはおはぐる筆の房楊枝と簪。

清如春柳含初月 艶似桃花帯暁烟 出典未詳。ただし平賀源内作『根南

志具佐』一之巻（宝曆一三年刊・一七六三）に、二代目瀬川菊之丞の美貌を形容する語として使用されており、「きよきことはしゅんりうのしよげつをふくむがごとく、ゑんなることはとうくわのぎやうゑんをおぶるにたり」の読みとなつてゐる。また、本書より後の天明二年（一七八二）刊洒落本『鯉池全盛噺』には「其の清き事は春柳含初月艶なる事は桃花帶曉烟」とあり、これも本書の読み方と異なつてゐる。

（20ウ・21オ）

湯の花 鉱泉中の成分の一部が沈殿して取り出された物。花器は岩、花は吹き出す温泉。

実は巻廻り過てなる 湯の花の沈殿物が、ある程度の時間を経てできることをいうか。

本草綱目に出たり 『本草綱目』巻五「温湯」の「主治」に「緒風筋骨攣縮及肌皮頑癢手足」とあり、温泉が様々な病に効能のあることは記されているが、「湯の花」に関する記述は見いだせない。

（21ウ・22オ）

上方の花は橋づめに咲 雁金五人男ものの決定版である竹田出雲作『男作五雁金』（寛保二年・一七四二・大坂竹本座初演）の「安治川芝居足揃の段」で、武士角左衛門の額に傷をつけた雁金文七ら男達一行を、角左衛門は安治川橋で待っている。そこで一行と喧嘩になり、だまし討ちにされ、文七らは角左衛門の死骸を川に投げ込む、という場がある。花は結び雁金（雁金文七）、「安」の字（庵平兵衛）、唐団扇と包み（布袋市右衛門）、千の上を槌形の極印二個が交叉（極印千右衛門）、太鼓と撥（雷庄九郎）のそれぞれの紋と尺八、一本差しの刀、また、頭巾と下駄は主に上方で上演された黒船忠右衛門ものが有名であり、忠右衛門を当たり役とした姉川新四郎に因み、姉川頭巾と呼ばれる。

あたまがちにしつ腰なし 最初は威圧的だが、尻腰が無い（意気地がない、だらしない）。

（22ウ・23オ）

六月祭礼 江戸では都市特有の夏祭に特色があり、六月には山王権現祭礼、赤坂氷川神社祭礼、神田明神天王祭、佃島の住吉神社祭礼などが集中していた。祭礼の時には神輿渡御の先導に立つ猿田彦神は、鼻高の赤面をつけて矛を持ち、金欄の緋の鳥兜を被る。花は猿田彦の面、矛、鳥兜。

○それまくく 祭礼で饅頭などを蒔いたか。

（23ウ・24オ）

縁花 縁端。縁側のはし。縁先。花器は煙草盆、花は煙管や煙草入れ。夕方、縁側で煙草を吸いながら一休みして油を売ることを表す。

名主月行事、是をいましむる 町名主は、上級町役人であり、火の元の取り締まりも行つた。また五人組組員の中から毎月交代で町用・公用を務めた月行事にも、喧嘩口論の仲裁や火の番・夜回り（冬から春）の職務があつた。故に往來の者がみだりに縁端に集まり、煙草を吸っておしゃべりをすることを嫌がつた、ということか。

（24ウ・25オ）

外花 外科。『人倫訓蒙図彙』（元禄三年刊・一六九〇）に、「【外科】外相に出る腫物を療するゆへに外科と号す」とあり、更に「【金瘡】手負其外一切の疵最詮要の法なり。此人躰大氣にして物に動せざるをよしとす。小氣にして臆したるは本人よりさきに散乱す。是金瘡の下品也」と別記されている。花は鋏や剃刀。

（25ウ・26オ）

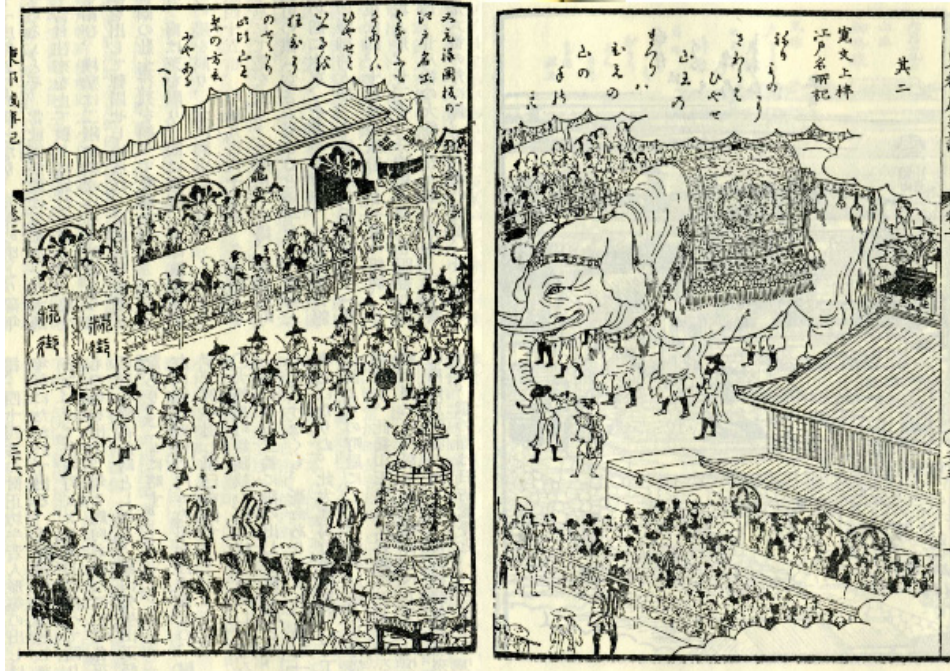
むかし南越国より渡る 享保一三年（一七二八）に長崎渡来し一四年五月に江戸に到着（『武江年表』）した広南の象のこと。南越とは中国古代

の国名で、広東、広西、ベトナム北部を領域としたもの。この時の象については、『象の貢の物語』（武藤純子、『武道』六月号所収、平成元年・一九八九・刊）、『象の旅 長崎から江戸へ』（石坂昌三、平成四年・一九九二・刊、新潮社）が詳しいが、その他にも「蔵書印のゾウ」（丹羽みさと、『環境という視座』）

アジア遊学「ト」

平成二三年七月）がある。広南から吉宗に贈られた象は、牡牝二匹が長崎に上陸したが牡のみが生き残り、江戸までの街道を、途中京都御所で従四位広南白象という官位を授かりつつも、踏破した。

今に麹町におゐて三〇年に一度山王祭で麹町から大象の作り物を出すことをいう。『東都歳時記』（天保九年刊・一八三八・斎藤月岑）に、「麴



町より朝鮮人來朝のねりものにて、大なる象の造りものを出しける事世に名高し。今は年々に出さずして付祭の番に当たりし時これを出す。」とある。また、これはぬいぐるみで作られた象で、麹町三丁目にあった伊豆蔵呉服店で仕立てたと思われる、川柳「いづからの鼠木綿は象になり」（柳樽拾遺）がある。『浮世絵芸術』一二七号（平成一〇年刊、一九九八）裏表紙に歌川重宣画の「江戸名所 山王まつり」が載り、麹町の作り物である布製の象が近景に描かれ、その解説（武藤純子）もある。

実もまんぢうとなる 象がまんぢゅうを餌のひとつとして食していたことは、『象の旅』（石坂昌三、新潮社、平成四年刊・一九九二）にも書かれ、また摂津国菟原郡深江村の大庄屋吉兵衛文書に「まんぢうは麦まんぢう あんなし七八十、但内三十はあん入」（『古文書通信』第一九号、一九九三年一月「享保の象行列」今林澄子）とある。花は象の顔や耳。木は象を引き回す際に使用した鳶口。

（26ウ・27オ）

気林 気はやし。気晴らし。花は盃、柄杓。

あい 間。相、会、合とも書く。他の者同士が盃のやりとりをしている間に入って、盃を受けること。

おさへ 押。盃を差された時、おしとめてもう一度飲ませること。また押し止められてもう一度飲んだ盃。『郭中奇譚』（明和八年刊か・一七七―）に「客 ソレ半七おさへのだ 茶屋亭主半七 わたくしも二日ゑひでござります、モシ花紫様さしあげませう 女郎 ナニのみもしなんしんもの、ソナナ盃はいや 茶屋半七 藤介殿チヨットおあい」とある。

佐々吞尊／＼八またの大蛇 『古事記』上巻及び『日本書紀』神代上に、須佐之男命（素戔鳴尊）が八俣（八岐）の大蛇を八塩折（八釵）の酒（何度も醸造した強い酒）で酔わせて十拳剣（十握剣）で斬り殺し、草薙の剣

を得て櫛名田比売（奇稻田姫）と婚姻する件がある。佐々尊は須佐之男の地口。

五、考察

見立絵本である本書の内容から判断すると、作者「酒楽齋」は狂歌に關係した人物である可能性がある。狂歌師人名録『狂歌知足振』（天明三年刊・一七八三）に載る狂歌師の中で「酒楽齋」を名乗る人物は記載されていない。また同年刊行『狂歌師細見』にも「酒楽齋」は見いだせない。

昭和二年（一九二七）七月発行の雑誌『本道楽』第三卷三号所収の「嗚呼奇々羅金鶏」の中で、野崎左文は「よしの屋酒楽」は天明年間の二、三の狂歌集に載る酒楽齋瀧磨と推測され、赤良、橘洲、菅江等と交わったらしい形跡があることが記される。また宿屋飯盛の文化元年（一八〇四）の紀行『草まくら』に、「爰に酒楽といへる者はたとせばかり昔大江戸に來りてやつがれが許へも訪ひ來りければ」とあることが紹介され、その言葉の通りとすると、天明四年（一七八四）に酒楽は石川雅望の許を訪ねたことになる。酒楽齋瀧磨が本書の作者であるならば、宿屋飯盛こと石川雅望と知り合う以前に本書序文は記されたのであり、刊行されたのも飯盛と知り合う以前である可能性がある。

『狂歌人名辞書』（狩野快庵編・昭和三年刊・文行堂）には、

瀧磨 酒楽齋瀧磨、又吉野庵酒楽とも号す、通称吉野七兵衛、駿河新通七丁目に住す、安永九年「二丁町細見」を作る、狂歌は四方赤良門人、寛政十年没す。

とある。『狂歌大観 索引篇』（狂歌大観刊行会・昭和六〇年刊・明治書院）には、「酒楽」で該当するのは寛文九年（一六六九）跋の狂歌絵本『狂

遊集』所収のもののみであり、年代から見ても同一人物である可能性は低い。『天明五大狂歌集総句索引』（宇田敏彦・平成八年刊・若草書房）作者別索引には見つからなかった。つまり『万載狂歌集』・『狂歌若葉集』・『徳和歌後万載集』・『狂言鶯蛙集』・『狂歌才蔵集』には酒楽齋瀧磨の狂歌は記載されていないということである。

『石川雅望研究』（粕谷宏紀・昭和六〇年・一九八五・刊・角川書店）天明六年（一七八六）の事項に、喜多川歌麿画の大判三枚続き浮世絵「三保の松原道中」に宿屋飯盛（石川雅望）の狂歌が載るが、この絵は酒楽齋夫婦が駿府と江戸を行き來する様子が描かれていることが指摘されている。加えてこの絵が載る『原色浮世絵大百科事典』第七卷（昭和五五年・一九八〇・刊・大修館）に、駿河二丁町に住む酒楽齋瀧磨が、四方赤良門に入つたことを記念して作られたものである、との解説も紹介されている。付け加えると『原色浮世絵大百科事典』解説には、この絵が薦屋重三郎板であり、「歌麿・薦重・狂歌師達の關係が如実に理解できる好例」とされている。歌麿も薦重も、それぞれ「筆の綾丸」「薦の唐丸」の名を持つ狂歌師でもあつた。なお、この絵に書かれている狂歌等を翻刻する。

天のはころもいくかへり するかのくにすみさを 楽とかいへる
やとりのあるし 瀧磨ぬしをことふきて 「羽衣の酒をたのしむ され
哥は あづまあそひのするかまひかも」 四方赤良 珠流河二丁町

酒楽齋のあるし わか大人の門に入てたはれ哥よめるときゝて文のたよ
りにつかはしける 「たはれ哥 これもなか／＼氣のくすり もとめに
のぼれ 蓬菜のやま」 つふり光 「たはれうた するかさいくのたけ
高く さてもあみたり よくつゝりたり」宿屋飯盛

更に『石川雅望研究』天明八年（一七八八）春の事項に、雅望が多色刷り狂歌絵本『画本虫撰』（薦屋重三郎板）を編纂したことが記される。そ

の中の蛩の狂歌を酒楽齋が担当し、「佐保川の水も汲ます身は蛩 中よしのはのくされゑんとて」が載る。延宝三年（一六七五）序、太田叙親、村井道弘編『南都名所集』には、「佐保川の水は、八景第四なり」とあり、佐保川の水が南都八景の一つであったことがわかる。また、西三条権中納言公時の「晩来千点流蛩乱」という一節のある漢詩や、前内大臣公忠の和歌「飛ほたる かげをつつして さほ川の 浅瀬にふかき心をぞしる」が載る。蛩で有名な佐保川が、吉野から流れてくることを踏まえ、自分の名前をも詠み込んだものであろう。

『石川雅望研究』には、石川雅望著の紀行文『草まくら』文化元年（一八〇四）四月一四日の条に、駿府に着いた雅望が酒楽齋に会おうとしたが、既に寛政一〇年（一七九八）に没していたという記述が載り、その注に、雅望が『六樹園狂歌』の中で瀧磨について詠ずる歌を詠んでいること、山東京伝画作の黄表紙『富士人穴見物』（天明八年刊）に、仁田四郎を人穴に案内する駿河町で名高い「酒楽」として登場すること、北尾政美画・山東京伝作の黄表紙『吉野屋酒楽』（天明八年刊）は、酒楽齋瀧磨を主人公とすること、喜多川歌麿画・山東京伝作の黄表紙『嗚呼奇々羅金鶏』（寛政元年刊・一七八九）に、金鶏が京都から江戸へ下る途中で駿河二丁町の吉野屋酒楽の許に身を寄せることとなっていることなどから、酒楽は駿府の娼家の主人であったと推測されている。加えて酒楽齋瀧磨に、見立絵本『嘸始小通形』（寛政初期）の作があることをも指摘している。

『喜多川歌麿展 解説編』（平成七年刊・一九九五、浅野秀剛、ティモシー・クラーク、千葉市美術館・大英博物館）の浅野氏解説によると、『絵本吾妻遊』（寛政二年初春序刊、葛屋重三郎板）と『絵本駿河舞』（寛政二年初春序刊、葛屋重三郎板）は前編と後編の關係にあり、どちらも江戸名所を描いて狂歌を配した内容で、序文を書く奇々羅金鶏が撰者兼スポン

サーである入銀物と思われる作品であるが、どちらにも一首ずつ酒楽齋の狂歌が載る。前書では吉原、後書では芝居二丁町である。更に浅野氏は「天明期の歌麿」（『国華』一二二九号所収、平成一〇年・一九九八・三月刊）で、酒楽齋は駿府の遊郭二丁町に住み、酒類の販売を業としていた人物であるとされ、黄表紙『吉野屋酒楽』に酒楽が自分の姿を一枚絵や団扇絵にして売り出したことが出てくるが、実際に名古屋テレビ放送蔵の団扇絵で、酒楽齋が扇頭にしていた歌舞伎役者の二代目市川門之助似顔で描かれた酒楽齋が店の前で煙草を吸っている図（勝川春好画）を紹介している。

ところで、見立絵本『嘸始小通形』は、序文に「小紋新法に曰 京橋の先生は天文を見て小紋を案し 三篇を作て譽を天下に顯す」とあり、山東京伝画作の『小紋裁』（天明四年刊・一七八四）、『小紋新法』（天明六年刊・一七八六）、『小紋雅話』（『小紋裁』の増補改題、寛政二年刊・一七〇〇）に影響されての刊行と推測される。その見立て小紋には、本書と共通する内容が数多く見られる。例えば本書は「酒中花」に始まり「酒の花」で終わるが、『嘸始小通形』でも酒を題材とした「くだをまきゝれ」「酒やのかり」があり、本書「波の花」と共通する「しほかまのけい」があるなどである。これらにより、本書の作者は酒楽齋瀧磨と推定される。

以上のことから、安永七年（一七七八）序を持つ本書の作者酒楽齋瀧磨は、天明四、五年（一七八四、八五）頃から宿屋飯盛と懇意になり、天明七年（一七八七）頃に四方赤良門に入り、同八年に一枚絵や狂歌絵本などで売り出し、寛政初年（一七九〇）（九五）に再び見立絵本を作成した、駿河在の狂歌師であったことがわかる。

本稿を成すにあたり、国文学研究資料館公募共同研究「近世風俗文化学の形成 忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺」プロジェクト関係者各位、同じく特定研究「近世的表現様式と知の越境 文学・芸能・絵画による総合研究」プロジェクト関係者各位には、多くのご教示をいただきました。感謝申し上げます。

また、川口元氏、後藤憲二氏には、多大なるご芳情とご教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

図版の掲載につきましてご許可下さいました大阪大学付属図書館に、心より深謝申し上げます。